

2014年8月9日 東京教区平和旬間 講演

麹町教会ヨセフホール

「罪は戸口で待ち伏せている(創世記4:7) —過去を見る眼と反知性主義—

三好千春 (援助修道会/南山大学)

1 カインとアベル (創世記4章2~16節)

アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた。主はカインに言われた。

「どうして怒るのか。どうして顔を伏せるのか。もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」

カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。

主はカインに言われた。「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」

カインは答えた。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」

主は言われた。「何とということをしたのか。お前の弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。今、お前は呪われた者となった。お前が流した弟の血を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお、呪われている。土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない。お前は地上をさまよい、さすらう者となる。」

カインは主に言った。「わたしの罪は重すぎて負いきれません。今日、あなたがわたしをこの土地から追放なさり、わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となってしまうと、わたしに出会う者はだれであれ、わたしを殺すでしょう。」

主はカインに言われた。「いや、それゆえカインを殺す者は、だれであれ7倍の復讐を受けるであろう。」

主はカインに出会う者がだれも彼を撃つことのないように、カインにしるしをつけられた。カインは主の前を去り、エデンの東、ノド(さすらい)の地に住んだ。

教皇フランシスコ 2014年「世界平和の日」(2014年1月1日)メッセージより

「お前の弟は、どこにいるのか」(創世記4:9)

2 (前略)

アベルは羊飼いで、カインは農夫です。二人の深いアイデンティティと使命は—たとえ彼らの活動と文化、神と被造物とのかかわり方に違いがあったとしても—「兄弟となること」です。しかし、カインによるアベルの殺害は、兄弟となるという使命を根底から拒絶したことを悲惨な形で示します。二人の物語(創世記4:1-16参照)は、一致を生き、互

いのことを心にかけるという、すべての人が招かれた使命を果たす困難さを明らかにします。(中略)

こうしてカインは、相手を兄弟として認め、よい関係をもち、神の前で生き、そのために他者を心にかけて守る責任を果たすことを拒絶します。神は「お前の弟は、どこにいるのか」とカインに尋ね、彼のしたことを説明するように求めます。カインは答えていません。「知りません。わたしは弟の番人でしょうか」(創世記4・9)。創世記が述べており、その後、「カインは主の前を去り」(同4・16)しました。(中略)

カインとアベルの物語は次のことを教えてくれます。兄弟愛への使命とともに、この使命を裏切る力が、人類のうちには刻まれています。日々の生活の中に存在する利己主義がこのことを示しています。利己主義は多くの戦争と不正の原因です。実際、多くの人々が兄弟姉妹の手で殺されています。これらの兄弟姉妹は自分たちが兄弟姉妹であることを認めません。すなわち、互いにかかわり合い、交わり合い、与え合うために造られたことを認めないのです。

2 「罪は戸口で待ち伏せている」

1) 罪＝「他者との関係における無責任で愚かな行為」(向井孝史)¹

昨今の日本の排外主義的な動きにおける内向きの心的態度

2) 反知性主義

反知性主義：

・「知的な生き方およびそれを代表するとされる人びとにたいする憤りと疑惑」「そのような生き方の価値をつねに極小化しようとする傾向」。(リチャード・ホーフスタッター)²

・熟考という骨の折れる活動から逃げ出す「思慮のない快樂主義」(ダニエル・リグニィ)³

・「実証性や客観性を軽んじ、自分が理解したいように世界を理解する態度」(佐藤優)。

¹ 向井孝史「創世記4章6-7節の一解釈」『神学研究』第50号、2003年。

² リチャード・ホーフスタッター(田村哲夫訳)『アメリカの反知性主義』(みすず書房、2003年)。

³ Daniel Rigney, "Three Kinds of Anti-Intellectualism: Rethinking Hofstadter", *Sociological Inquiry*, Vol.61, No.4, 1991. 竹内洋による書評『アメリカの反知性主義』より引用。書評空間 2013年12月12日。 <http://booklog.kinokuniya.co.jp/takeuchi/archives/2013/12/12/>

・「単純でフェイクな物語を作りあげ、検証や研究も考慮せず、自分が理解したいように世界を理解すること。」⁴

3 「カインは弟アベルを襲って殺した」—日本近代と「力」(フォース)の追求—

1) 「力」(フォース)と力(パワー)

・「力」(フォース): 武器、規則、法律、軍隊、お金、社会的ステイタスなど。外よりの力。上昇につながる。

・力(パワー): 内なる力。自分の内に働く力。種子が木となる潜在力を秘めているように(サティシュ・クマール)⁵。神の力。「弱さの中でこそ発揮される力」(Ⅱコリント 12:9) 下降につながる。

2) 植民地支配と「兄弟」

・大日本帝国の「家族国家」論
日本＝「兄」
朝鮮＝「弟」(養子)

4 「わたしの罪は重すぎて負いきれません」—過去に直面する—

1) 日本は PTSD にかかっている (アレン・ネルソン)⁶

2) 社会的和解に向けて—人間性の回復—

・過去の加害を認め語る
・被害者側の言葉を聴く

⁴ 「大波小波」『中日新聞 夕刊』2014年5月8日。

⁵ サティシュ・クマール『サティシュ・クマールの今、ここにある未来(ナマケモノ DVDブック)』(ゆっくり堂、2010年)。高橋源一郎・辻信一『弱さの思想 たそがれを抱きしめる』(大月書房、2014年)より重印。

⁶ アレン・ネルソン『戦場で心が壊れて—元海兵隊員の証言』(新日本出版社、2006年)。

5 「愚かなふるまいに戻らないように」(詩 85 : 9)

わたしは神が宣言なさるのを聞きます。
 主は平和を宣言されます。
 御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に
 彼らが愚かなふるまいに戻らないように。
 主を畏れる人に救いは近く
 栄光はわたしたちの地にとどまるでしょう。
 慈しみとまことは出会い
 正義と平和は口づけし
 まことは地から萌えいで
 正義は天から注がれます。(詩編 85 : 9~12)

《H・ベルクソンによる「閉じた社会」と「開いた社会」》⁷

・「閉じた社会」：地域共同体や民族や国家など、メンバーと非メンバーの区別を基礎にして成立している社会

・「開いた社会」：通常社会と質を異にする社会。万人に開かれ、人がメンバーと非メンバーの区別などどうでもよいと思うに至った時、そこに開いた社会が出現する。

「万人をわが兄弟と感じうる」ところに成立する社会性⁸。

⇒「神の国」＝「兄弟性を生きる」こと。

ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(ルカ 17 : 20~21)

⁷ 高橋由典『社会学者、聖書を読む』(教文館、2009年)

⁸ 高橋由典『行為論的思考 体験選択と社会学』(ミネルヴァ書房、2007年)